

海外だより
ドイツ留学体験記（5）

木 村 理

胃 と 腸

第28巻 第1号 別刷
1993年 1月25日 発行

Stomack and Intestine (Tokyo), Vol. 28 No. 1 1993 IGAKU-SHOIN Tokyo Japan

医学書院

ドイツ留学体験記(5)

東京大学第1外科

木村 理

東欧の人々

2年余りのドイツ留学の間に世界は大きく変化した。ドイツ人でさえ想像しなかったベルリンの壁の崩壊の後、1年もたたずにドイツは統一された。壁が壊される3か月前にドイツ人と話したとき、彼らはHonecker旧東独書記長の「壁」は今後50年にわたって存続し続けるだろう」という言葉を引用し、少なくとも今世紀中の統一はありえない、と暗い顔で語っていたものである。壁の崩壊という歴史に直面したときには、Mössner教授も涙を禁じえなかったという。

かくして東独は地上から消滅した。更に驚くべきことに、それから間もなくソ連もまた消え去った。共産党の解体を、そしてその後のソ連の消滅をいったい誰が想像できたであろう。

語学研修中にMarburgで親しくなった友人の1人にアルメニア人Gagikがいる。われわれがWürzburgに来てからも、行き来は続き、彼の研究先のErlangenにも何度か訪れた。Gagikはソ連消滅以前から、自分がソ連人と呼ばれることを非常に嫌がっており、常にアルメニア人であることを強調し、そのことに誇りを持っていた。その彼でさえも、「ソ連の9割の農民は無知文盲で



Marburg 語学学校の Humboldt の仲間とその家族たちを Würzburg の自宅に招待した。ロシア人、エジプト人、アルメニア人、ウクライナ人など、多彩である。

あり、共産党しか知らない。共産党支配が終わることは、残念ながらありえないであろう」と言っていた。

語学学校に通っていた4か月の間に、多くの東欧人に接する機会に恵まれた。一般に、東欧の人々は陰気で活気がないと言われる。実際、それはほぼ当たっていたが、一概にそうとも言えない面も多い。一口に東欧人といっても、国によって様々な違いがある。例えば旧ソ連、とりわけロシアやウクライナ出身の者は明るくのびのびとしており、明らかにポーランド、ハンガリーあるいは旧東ドイツ出身者とは異なる。これは共産圏における支配国と被支配国、つまりロシア語を話す国とそれを強制的に学ばせられる国との違いだろう。

ロシア人の Humboldt 奨学生には自国でかなり裕福な生活をしてきた者が多く、多くは英語が非常にうまい。既に8歳ごろから家庭教師について学んでいたという。日本人に比べてユーモアのセンスに富み、何より、競争の激しい資本主義の国々では既に忘れ去られてしまった優しさや強い連帯意識を持っていた。Gagikも、妻子が国に帰って独りになったときにも、自分で料理を作ってアパートに招待してくれ、われわれはいつも楽しい会話の時間を過ごした。何事につけ形式的で、とにかくお金で解決してしまう傾向がある日本人として、その真心にいつも心を洗われる気持ちであった。

ソ連崩壊以前には、彼らの唯一の楽しみは自分たちにはどうにもならない政治や社会を皮肉ることであった。例えば、2大新聞であるプラウダ(ロシア語で「真実」の意)とイズベスチヤ(同「報道」の意)について、「プラウダには真実はないが報道はある。イズベスチヤには真実はあるが報道がない」などと言って、やりどころのない不満をぶつけていた。アメリカから来ていたPeterも「世界で最も面白いジョークはソ連から生まれる」と言って脱帽しており、日本でもスターリン・ジョークという本が出ている。内容もなかなかである。

このような社会制度の違いやそこから生じる考え方の違いが、今日でも旧西独と旧東独の人々の間に軋轢を生む大きな原因の一つになっていることは間違いない。旧東独の人々は「二級市民」と蔑まれ、工場などではトルコ人やベトナム人と同列の扱いを受けているという。

旧東独では、統一後の失業率の増大や旧西独との賃金格差に反発し、ネオナチズムの思想を信奉する者が増え始めている。しかし、同じ言葉を喋り、同じ物を食べ、同じ文化を持つ両者は、意外に早く混じり合ってしまうのではないかと私は思う。

ること
た。
友人に
気で活
ていた
友人と
ま旧ソ
くのび
ある
におけ
それを

裕福な
まい。
いう。
競争
まった
妻子が
作って
い会話
くお金
真心に

旧東独の Magdeburg 大学からわれわれのラボに来ていた 30 歳の外科医 Frank と、10 か月間一緒に仕事をした。とても熱心ではあったが、初めのうち彼は非常に陰気で暗かった。人と話すときにも相手の顔を見ることができず、うつむき加減に、かつ 30 度ほど斜めを向いて話すのである。お金が十分でないので、夕食は買い置きのパンで済ます。そんな具合に彼は Würzburg で研究し、ラボの仲間と話し、欧米のいくつかの学会に参加した。

そして 10 か月後、Frank は全く別人になっていた。「ワタル、ビールでも飲みに行こうぜ！」などと、実に颯爽たるもので、いわゆる“本物のドイツ人”になってしまった。この変身ぶりには Mössner 教授もラボの仲間も皆びっくりしていた。

もちろん、旧東独時代の人の良さも忘れていない。彼が Magdeburg に帰った後、家族で訪れたところ、当直勤務中だった彼は、私たちを自分のアパートに泊めてくれた。私たちのために、夕食はおろか翌日の朝食まで前もって用意してあった。そして、私のために事前に教授の許可を得、入院患者 1 人 1 人に私を紹介しながら、病院中を案内してくれた。

エピソード

2 年 4 か月のドイツ生活を終えて、われわれはドイツを後にした。振り返ってみればあつという間の出来事であったが、そこで様々な未知の、そして生々しい体験をした。何よりもドイツ人あるいは外国人が、宗教や人種、文化の違いはあれ、その根本では、結局自分たちと同じように考え、悩み、行動することを目の当たりにしてきたことが素晴らしかった。逆に、文化の違いをお互いに認め合い、受け入れなくてはいけないことも学んだ。長男が週 1 回通っていた Frankfurt 日本人学校補習校の教室には、「異なるものを認めよう」という標語が掲げられている。島国に住み、何事も画一化してしまう傾向のあるわれわれが、特に肝に銘じておくべきことであろう。

ドイツを去るに当たって、Mössner 一家、ラボの人々、大家さんの Clos さん、日本に興味を持ち、いつも家族ぐるみのお付き合いをしてくれた Merkel さん一家、ルーマニアから死を覚悟で逃亡してきた Günter、子供の学校、幼稚園の仲間たちが何度もパーティーをし、別れを惜しんでくれた。

1992 年 5 月 30 日のよく晴れた午後、われわれ家族は、皆に見送られながら Frankfurt に向けて車を走らせた。

□海外文献紹介□

診断および治療的 ERCP 後の菌血症

Bacteremia following diagnostic and therapeutic ERCP: *Kullman E, et al* (Gastrointest Endosc 38: 444-449, 1992)

菌血症は粘膜損傷に伴い、抜歯 85%、食道拡張 30~45%、胃内視鏡 5%、直腸鏡 4.7% などの頻度で起こりうることが知られている。そこで、ERCP に伴う菌血症の頻度を明らかにし、予防的抗生剤投与の合理的な方法を検討するために今回の調査を行った。

180 例(計 194 件)に診断および治療目的の ERCP を施行し、検査前、カニューレション 5 分後、検査終了後 5 分後、および 15 分後に採血し、

菌血症の合併する頻度を調べた。126 件の診断目的の検査では 19 件(15%)に、68 件の治療目的の検査では 18 件(27%)で菌血症が合併した。9 例では複数の菌が培養され、全体では計 16 種の細菌が同定された。連鎖球菌、特に α 溶血性が最も多く、菌血症患者の 38% で同定された。診断と治療目的の検査の間では、発熱、肺炎、菌血症の頻度に有意の差は認めなかった。また、菌血症を合併する頻度は、膵管・胆管の閉塞の有無とも関係なかった。しかし、胆道閉塞患者の多くは診断時に閉塞解除のドレナージを受けた。

われわれは、診断または治療目的の ERCP を受ける患者にルーチンで抗生剤を投与する必要はないと考えるが、このような予防策がある

特定の診断や治療時に、または、心臓弁膜症患者に必要か否かという問題は、対照をおいた無作意試験で今後検討される必要がある。

【訳者コメント】菌が培養されても、一過性で目立った臨床症状が伴わないものが多かったようだが、菌血症の頻度を高いとみるか、低いとみるか？わが国では比較的高頻度に予防的抗生剤投与が行われているようだが、最近、特に MRSA などの耐性菌が問題となっており、安易な予防的投与については見直す必要もあろう。いずれにせよ、ERCP のような検査では、内視鏡やカテーテルを感染源としないように細心の注意を払う必要がある。

(関東通信病院消化器内科

伊藤 慎芳 抄)